

外国人の人権尊重に関する実践事例

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

徳島県小松島市

○学校名

小松島市新開小学校

○学校のURL

<http://e-school.e-tokushima.or.jp/komatsushima/es/shinbari/html>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】5学年のみ2学級、【特別支援学級】3学級、【合計】10学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】193人（平成28年10月12日現在）
（内訳：1年生26人、2年生29人、3年生35人、4年生38人、5年生37人、6年生28人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

平成26・27年度文部科学省人権教育研究指定校

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

『生きる力』を育み、人権を尊重し、
正しく・強く・前向きに生きる児童の育成をめざす。

(1) 目標を持ち、真理探究のために学ぶ児童を育てる。

(2) 新開小を愛し、奉仕精神に富む児童を育てる。

『ひたむきに 凜と 今を生きる』（教育信条）

(3) 生命や物を大切にし、積極的に自分の安全を守る児童を育てる。

【人権教育目標】

一人一人の児童がその発達段階に応じ、人権の意義・内容や重要性について理解し、「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること」ができるようになり、それが様々な場面や状況下での具体的な態度や行動に表れるとともに、人権が尊重される社会づくりに向けた行動につながるようにする。

○人権教育に係る取組一口メモ

自他の大切さを認め合い、共に生きる児童の育成をめざした人権教育の創造
～人権尊重の視点に立った学校づくりをめざして～

○人権教育にかかる取組の全体概要

①「人権が尊重される人間関係づくり」

- ・「あいさつ」「ありがとう」「ごめんなさい」の言葉が飛び交う学級や学校づくり
- ・互いのよさや可能性を認め合える仲間づくり
- ・学年を越えた豊かな人間関係づくり

②「人権が尊重される学習活動づくり」

- ・人の話をしっかり聞くことができる習慣づくり
- ・「わからない時にわからないと言える」学級集団づくり
- ・児童が主体的に、友達と協力し、参加し、体験する学習活動
- ・「振り返り」から生活に返す人権学習

③「人権が尊重される環境づくり」

- ・人権尊重の視点に立った、環境づくり
- ・「チーム新開」として風通しのよい職場環境づくり

3. 実践事例の内容

◆ ヘイトスピーチと外国人の人権について考える

(取組のねらい、目的)

5年生の児童は、元気よく活発である。みんな仲が良く、困っている児童がいると声かけができる優しさがある。それは、障がいがある友達と5年間一緒に生活してきたためであると感じている。今後更に「ちがい」を互いに理解し合い、望ましい人間関係の在り方を考えていこうとする態度を育てたいと考えている。

(取組を始めたきっかけ)

5年生には、保護者が国際結婚により日本籍と外国籍の両方をもつ児童AさんとBさんがいる。それにもかかわらず、近くのスーパーマーケットで見かけた外国人に対して失礼な言葉を発した人のまねをする児童がいた。この話を聞いたAさんとBさんはどう感じるだろうかと思いこの話をクラスでしたときに、AさんもBさんもこの外国人の話について余り関心のない姿を見せ、傍観者的な立場に立っていた。このことから、「ちがい」を互いに理解し合い、望ましい人間関係の在り方を考えていこうとする態度を育てたいと考え、本取組を進めてきた。

(取組の内容)

第5学年による道徳（人権）の取組から

1 主題 違いを認め、共に生きる

2 主題設定の理由

学校生活アンケートの結果から、「学校生活は楽しい」の項目に対し、「そうである」と全員が回答している、「困った友達がいたら助けようとする」の項目に対してもほぼ全員の児童が「助ける」と答えている。小さなトラブルはあるが、共に支え合い、励まし合える集団である。しかし、仲の良い友達が固定化されてきたことで、友達のことを考えずに行動する場面が見られるようになってきた。また、自分に自信を持てず、意思表示をすることに苦手意識をもち、周りに流されてしまう場面も見受けられる。アンケートの結果からは、自分の考えを発表することが苦手な児童の多いことや、自分のことが余り好きではなく、長所がないと考えている自尊感情の低い児童が少なくないことも明らかになった。

そこで、自尊感情を高めるため、短所だと思っていたことは少し視点を変えるだけで長所へと認識を改める「リフレーミング」を行った。自分が短所だと思っていたことを友達が長所だと言い換えてくれたことで「そういう考えができるのだ。」と笑顔でうれしそうにしていた。自分にはたくさん短所があると言っていた児童は、「リフレーミングされたことで自分の短所が減ったように思う。」と感想を述べていた。更に、ダイヤモンドランキングの手法を用いて学級活動を行った。その目的は自分の考えを明確に友達に伝えることと、伝えられたら共感的な理解を示すことで互いの意見や考えを尊重し合う態度を育てることである。これらの活動を通して自分の中でぼんやりとしていた友達の概念が少し明確になり、「自分にとっての友達の存在」「友達に求めるもの」「友達とはどうあるべきか」などについて考える機会となった。更に友達の意見を尊重しつつも自分の意見や考えも大切にしたいという発言が見られた。学級の仲間として認め合えるようになってきたことに、この活動での一定の成果が感じられる。

しかし、身近な友達だけではなく、自分とふだん余り関わりのない人に対して同じような考えを持てるかという疑問である。スーパーなどで見かけた外国の人に対して失礼な言葉のまねをしたり、テレビで見た外国の衣食住などの文化に対して好ましくない発言をしたりしたことがあった。本学級には親が国際結婚により日本籍と外国籍の児童が在籍している。周りはそのことを気にしている様子は見られないし、ふだんは仲良く過ごし偏見を持っているようには感じられない。しかし、その真意については疑問が残る。ふだんは何事もないように過ごしている児童は、周りから何かを感じとり、保護者の祖国の言葉や文化を表現しにくいのかもかもしれない。

本資料「わかってくれるかな」では、和太鼓もチャンクも両方大好きな主人公に象徴されるように、民族・国籍・言語・文化・慣習などの違いをプラス面としてとらえている。こうした違いの中から互いのすばらしさを確認し合い、より深い関係を築き上げることの大切さを学んでほしい。そして、自分たちの生活を見つめ直し相手を思いやり、違いを認め合い共に生きていこうとする態度を育てたいと考え、本主題を設定した。

3 ねらい

自尊感情を基盤として、相手を思いやり、他の人の考えや文化などを尊重し、多様性を認めようとする態度を育てる。

4 指導計画

(1) これまでの学習

- ・道徳「ちがうこと ぼんざい」（ひかり）…………… 1時間
- ・学級活動「友だちについて考えよう」…………… 2時間
- ・道徳「言葉のおくりもの」（道徳県副読本）…………… 1時間

(2) 現在の学習

- ・道徳「わかってくれるかな」（ひかり）…………… 2時間（本時2／2）

(3) これからの学習

- ・総合的な学習の時間「外国について調べよう」…………… 7時間

5 本時の学習

(1) 目標

様々な違いを認め合うためにできることを考え、違いを尊重し、受容していかうとする意欲を高める。

(2) 普遍的な学習のテーマ 多文化共生

(3) 展開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1 本時の学習課題をつかむ。	○ 前時までの学習を振り返り、本時の学習課題をつかませる。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 違いを認め合えるようになるためにできることは何だろう。 </div>	
2 これまでの自分たちの体験から考える。	○ 出会ったりテレビなどで見た外国の人に対してどのように感じたのか考えさせる。 ○ 相手の立場になって考えさせる。 ○ 話しやすい雰囲気になるようにする。
3 今後、外国の人と出会ったときにどう行動すればよいかグループで話し合う。	○ 外国の人に対してどのように考えているのかグループで話し合わせ、自分と違っていても相手を尊重することの大切さに気付かせる。 ①②
4 本時の学習を振り返る。	○ 互いの相違を認め、尊重し、受容していかうとする意欲を高められるようにする。 ①

(4) 評価

- ・ 様々な違いを認め合うためにできることを考え、違いを尊重し、受容していかうとする意欲が高まったか。 (価値的・態度的側面) ①
- ・ 友達の意見を共感的に聞いたり、自分の意見を整理して発表したりすることができたか。 (技能的側面) ②

(5) 考察

外国の文化と自分たちの生活との関わりを考えられるよう「多文化共生」というテーマで取り組んだ。「多文化共生」とは、互いの違いを認め合い、異なる文化や考え方を尊重し合いながら生きていくことであると考えます。

外国人の行動や多様な考え方を受け入れることができるように、国により文化や習慣など様々な違いがあり、互いに理解し合うことの大切さや、日本で暮らす外国人の不安や不自由さについても伝えていくことが大切である。また、様々な国の方と「共生」するには、日本の文化を知ることも必要だと考える。

授業に関しては、クラスの児童2名の保護者が外国の方であるということから、その児童たちが自信をもてるようにという視点からの課題設定であった。外国人に対しての決めつけや偏見をなくしていくためには、「君たちとはちがうのか」という発問をすることで、共通点や違いについて考えさせ、同じ人間と

して尊重し合わなければならないことを児童に気付かせたいと考えた。そういう発言が児童の中から出てくるように、グループ活動を取り入れてみた。しかし、児童の感想の中では外国人を見かけたときの話が出ていたが、授業中の意見としては出てこなかった。

気になった点は、児童が「外国人」という言葉を何度も発言していたことである。その2名の児童がどう捉えていたのかが気になった。誰が外国人かという視点に立つと、外国の方から見れば日本人も外国人である。違いや多様性を受け入れられないことから、差別意識が生まれると考える。〇〇だからという決めつけた考え方を変える必要がある。今後の授業の取組で、互いの個性を認め合い、つながり合えるようにし、2名の児童が自分のつらい部分を話せるようなクラスにしていきたいと思う。

4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

(1) 課題

大きな課題は、外国籍の2人の児童の自己開示がなかなか進まないことである。Aさんの場合、自らの長所である英語力について、学級の中では出さないようにしており、外国語の時間にも、意図的に日本的な発音で会話し、目立たないように気を遣っている。外見的な部分についても、他人からの評価をネガティブに受け止め、日本人の集団の中で目立つことを避けようとする傾向がある。

Aさんは、3年生のときに転校してきた。転校直後に行われた校内の持久走大会で1位になったため、周りの友達から、様々な傷つく言葉を投げかけられたという。それらの言葉の中には、ねたみやひがみが含まれる言葉も少なくなかったため、目立つことは良くないことであると受け止め、このような課題が生じたと考える。

(2) 課題に対する対応

2人の児童に対して、一方的に自己開示を求めるだけでは、決して課題解決はできない。そこで、周りの仲間がどのように2人の気持ちに寄り添い、互いに心を開いていくことができるかが重要な鍵となる。

2人の特徴も、外見的な違いも、当たり前なこと、個性として互いに受け止めることができれば、彼らも勇気を持って自己開示できる状況が生まれると考える。

5. 実践事例の実績、実施による効果

(1) 授業後の取組について

人それぞれ大切な存在であることを認め合えるようにと考え、リフレーミングやダイヤモンドランキングを取り入れ、自他の意見を認め合えるように学級活動を行ってきた。その結果、少しずつ様々な友達に声かけができるようになってきているように感じる。

【ダイヤモンドランキング】

ダイヤモンドランキングは、自分の考えを明確に友達に伝え、伝えられたら共感的な理解を示し、互いの意見や考えを尊重し合う態度を育てることを目的としている。自分の中でぼんやりとしていた「友達というもの」を明確化させるために「自分にとっての友達」の存在「友達に求めるもの」「友達とはどうあるべきか」などについて考える機会となるようにしたい。そして、個々が考えることを認め合える心を育み、望ましい人間関係を築いていこうとする実践的態度を養ってきたいと考えている。



(2) 取組の成果

日々の日常生活の中で、少しずつ取組の効果を感じる場面が見られる。特に、多様な意見が出されたときや、自らと異なる考えが出てきた際にも、それらを受容的に受け止め、それはそれで良い意見だと考えることができるようになってきた。

また、Aさん、Bさんが自分たちのルーツである国や地域のことについて自ら調べたり、発表したりすることができるようになったことは大きな変容である。このことは、学級全体が、少なからず成長したことの証しである。

(3) 取組の考察

私たちは、知らない内に日本人としてのアイデンティティーを身につけている。しかし、その中には、排他的な考えや、異文化を受け入れることに躊躇する気持ちが根強く、今回の取組を通じて、そのことの弊害を強く感じた。私たちは、そのような考え方を打ち砕いて、共生できる集団づくり、誰もが安心して過ごせる社会づくりを進めなければならない。そのために、学級の中で互いに認め合える仲間づくりをしていくことが重要である。

6. 実践事例についての評価

(1) 取組についての評価

この取組を重ねる中で、Aさん、Bさんが自らのルーツである国のことを調べ、学級で発表することができた。それ以来、友達に対して自信を持ち、自分の国の様子を伝える場面が増えてきた。Aさん、Bさんがありのままの自分で良いと自信を持って生活できるようになってきたことや、学級の中に違いや個性を自然と受け入れる土壌が培われてきたと感じた。

しかし、保護者からの聞き取りの中に、次のような事例があった。市内の小学校が合同で実施した会にAさんが参加した際、他校の児童がAさんの髪の色や容姿について口にしていたそうである。Aさんは、めずらしいものを見るような視線や言葉に悲しい思いをしたらしい。他校の児童の言葉は、Aさんを差別するような言葉ではなかったが、異質なものとして見られたことが心に痛かったのである。

(2) 今後の課題

多文化共生というテーマを掲げて、日々の実践に当たっているが、うまくいく部分とまだまだ思うように進まない部分がある。本学級において、AさんとBさんの存在は、ごく当たり前のものとなりつつある。今後は、学級の中に留まることなく、社会の中で多様な文化や多様性の理解を進め、すべての人が幸せに暮らせる社会づくりをになう児童を育てる教育の取組を続けていきたい。

そして、国際的な視野に立って、人種差別や民族差別的な言動を許さず、国際社会の一員として、すべての人の人権を尊重できるような集団づくりを目指したい。